

物性物理学

寺崎一郎

2024 年 10 月 31 日

1 第3回

前回の復習から、考える。

1. 自由電子は e^{ikx} でエネルギーは、 $\frac{\hbar^2 k^2}{2m}$ 運動量は $\hbar k$ となる。

2. PBCC では $L = Na$ となり、

$$\varphi(x) = \varphi(x + L) = \varphi(x + Na)$$

となり、 $k = \frac{2\pi}{Na}$ の整数 $\frac{1}{\sqrt{L}} e^{ikx}$ となる、

3. 第一 BZ については、

$$-\frac{\pi}{a} \leq k \leq \frac{\pi}{a}$$

となる。独立な k のセットである。

4. a の並進対称性としては、

$$\hat{T}\varphi(x) = \varphi(x + a) = \varphi(x)$$

$$\hat{T}\varphi(k) = e^{ika}\varphi(k)$$

となる。同じ固有値 e^{ika} をもつ k の組

$$-\frac{\pi}{a} \leq k \leq \frac{\pi}{a}$$

とすると、

$$k = k_0 + k_m$$

$$k_m = \frac{2\pi}{a}m$$

となる。

1.0.1 二次元の自由電子

二次元の自由電子では、

$$-\frac{\hbar^2}{2m} \left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \right) \varphi(x, y) = \varepsilon \varphi(x, y)$$

となり、 $\varphi(x, y) = X(x)Y(y)$ と仮定する。すると、

$$-\frac{\hbar^2}{2m} \frac{\partial^2 X}{\partial x^2} Y(y) - \frac{\hbar^2}{2m} X(x) \frac{\partial^2 Y}{\partial y^2} = \varepsilon X(x)Y(y)$$

となることから、辺々を XY で割ると、

$$X \propto e^{ik_x x}, Y \propto e^{ik_y y}$$

となることから、 $\varepsilon_x = \frac{\hbar^2 k_x^2}{2m}$, $\varepsilon_y = \frac{\hbar^2 k_y^2}{2m}$, ε_y となる。

ここから、

$$\exp(\mathbf{k} \cdot \mathbf{\Gamma}) = \exp(k_x x + k_y y)$$

となる。エネルギーとしては、

$$\varepsilon = \frac{\hbar^2}{2m}(k_x^2 + k_y^2)$$

となる。さらに、運動量は、

$$\mathbf{p} = \hbar \mathbf{k} = (\hbar k_x, \hbar k_y)$$

となる。さらに、PBC は、

$$\varphi(x, y) = \varphi(x + L, y) = \varphi(x, y + L)$$

となることがわかる。 $e^{ik_x L} = e^{ik_y L} = 1$ となる。ことから、規格化されて、

$$k_x = \frac{2\pi}{L}n_x, k_y = \frac{2\pi}{L}n_y$$

となり、規格化して、 $\int_0^L \int_0^L dx dy |\varphi|^2 = 1$ となることから、 $A = \frac{1}{L}$ をとり、

$$\varphi(x, y) = \frac{1}{\sqrt{L^2}} e^{i\mathbf{k} \cdot \mathbf{r}}$$

となるために、第一 BZ は、 $-\frac{\pi}{a} \leq k_x \leq \frac{\pi}{a}, -\frac{\pi}{a} \leq k_y \leq \frac{\pi}{a}$ となる。

1.0.2 a の並進対称性

a の並進対称性は、

$$\hat{T}_x \varphi(x, y) = \varphi(x + a, y) = \varphi(x, y)$$

$$\varphi(x, y) = \frac{1}{L} e^{i\mathbf{k} \cdot \mathbf{r}}$$

$$\hat{T}_x \varphi(x, y) = e^{ik_x a} \varphi(x, y)$$

$$\begin{aligned} \varphi(x + a, y) &= \frac{1}{L} e^{i\mathbf{k} \cdot \mathbf{r}} \\ &= e^{ik_x a} \varphi(x, y) \end{aligned}$$

となることから、第一 BZ 内の k_x に対して、

$$k_x + k_{m_x}$$

は、 \hat{T}_x に対して、同じ固有値 $e^{ik_x a}$ を与える。

$$K_{m_x} = \frac{2\pi}{a} m_x$$

ただし、 m_x は整数である。どのように $k_{m_y} = \frac{2\pi}{a} m_y$ が定義できる。

1.0.3 逆格子

実格子は a ずつの点であるが、逆格子は $\frac{2\pi}{a}$ ずつの点のことである。

二次元の場合には、逆格子は $-\frac{\pi}{a} \leq k_x \leq \frac{\pi}{a}, -\frac{\pi}{a} \leq k_y \leq \frac{\pi}{a}$ が第一 BZ になり、次は、 $k_x = \pm \frac{2\pi}{a}, k_y = \pm \frac{2\pi}{a}$ w それぞれ結んだひし形から第一 BZ を引いた値である。

さてもう少し抽象的なことをいおう。まずは実格子に必要なベクトルのことを

$$\begin{cases} \mathbf{a}_1 = a\mathbf{e}_x \\ \mathbf{a}_2 = a\mathbf{e}_y \end{cases}$$

となる。そして、逆格子は

$$\begin{cases} \mathbf{b}_1 = \frac{2\pi}{a} \mathbf{e}_x = \frac{2\pi}{a} \mathbf{e}_{k_x} \\ \mathbf{b}_2 = \frac{2\pi}{a} \mathbf{e}_y = \frac{2\pi}{a} \mathbf{e}_{k_y} \end{cases}$$

となる。

1.0.4 一般の二次元格子と逆格子

一般の二次格子を拡張しておく。

$$|\mathbf{a}_1| = |\mathbf{a}_2|$$

となり、 \mathbf{a}_1 と \mathbf{a}_2 は直交しない。対応する $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2$ はどう取ったらいいか？ 一次元の場合には、

$$\exp(ika) = \exp(i(k + k_m)a)$$

となり、 $k_m = \frac{2\pi}{a}m$ となる、二次元正方格子の場合には、

$$\exp(i\mathbf{k} \cdot \mathbf{r}) \rightarrow \exp(\mathbf{k}(\mathbf{r} + \mathbf{a}))$$

となる。ここから、 $\mathbf{K} \cdot \mathbf{a}$ が 2π の整数倍になるようにする。ここで、 $\mathbf{a}_1 \cdot \mathbf{b}_1 = 2\pi, \mathbf{a}_1 \cdot \mathbf{b}_2 = \mathbf{a}_2 \cdot \mathbf{b}_1 = 0, \mathbf{a}_2 \cdot \mathbf{b}_2 = 2\pi$ となることを用いて、

$$\begin{aligned} \mathbf{k} &= n_1 \mathbf{b}_1 + n_2 \mathbf{b}_2 \\ \mathbf{k} \cdot \mathbf{a} &= (m_1 \mathbf{b}_1 + m_2 \mathbf{b}_2) \cdot (n_1 \mathbf{a}_1 + n_2 \mathbf{a}_2) \\ &= m_1 n_1 \mathbf{a}_1 \cdot \mathbf{b}_1 + m_2 n_2 \mathbf{a}_2 \cdot \mathbf{b}_2 + m_1 n_2 \mathbf{a}_1 \cdot \mathbf{b}_2 + m_2 n_1 \mathbf{a}_2 \cdot \mathbf{b}_1 \\ &= 2\pi(m_1 n_1 + m_2 n_2) \end{aligned}$$

これから、これを拡張すると、一般の $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ に対して、

$$\begin{cases} \mathbf{a}_1 \cdot \mathbf{b}_1 = 2\pi \\ \mathbf{a}_1 \cdot \mathbf{b}_2 = \mathbf{a}_2 \cdot \mathbf{b}_1 = 0 \\ \mathbf{a}_2 \cdot \mathbf{b}_2 = 2\pi \end{cases}$$

となるように $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2$ となるように決める。

第三回の画像を見ながら逆格子の世界には色がない。違う原子があったから撮って色が違うわけではない。色が互い違いにちがうときに、同じところに戻って来るのは $2a$ である。

逆格子の世界に種類はないので、最小になるように選ぶ。

\mathbf{a}_i を基本並進ベクトルであり \mathbf{b}_j は基本逆格子ベクトルであり、 $\mathbf{a}_i \cdot \mathbf{b}_j = 2\pi \delta_{ij}$ となる。

2 四回目

2.0.1 ブラケット記法

$|n\rangle$ 状態の n に対するケットベクトルは縦ベクトルであり、 $\langle m|$ は、

$$\langle m|n\rangle = \int d^3r \varphi_m^*(\mathbf{r}) \varphi_n(\mathbf{r})$$

となり、

$$\langle m|\hat{A}|n\rangle = \int d^3r \varphi_m^*(\mathbf{r}) \hat{A} \varphi_n(\mathbf{r}) = A_{mn}$$

となり、行列要素となる。正規直交基底としては、

$$\langle m|n\rangle = \delta_{mn}$$

となり、完全系条件は、

$$\sum_n |n\rangle\langle n| = 1$$

となる。

2.0.2 変分法

変分法とは、

$$\hat{H}|n\rangle = \varepsilon_n|n\rangle$$

としてあげると、 $\langle m|n\rangle = \delta_{mn}$ となる。

個々から任意の状態 $|\varphi\rangle = \sum_n c_n|n\rangle$ とすると、

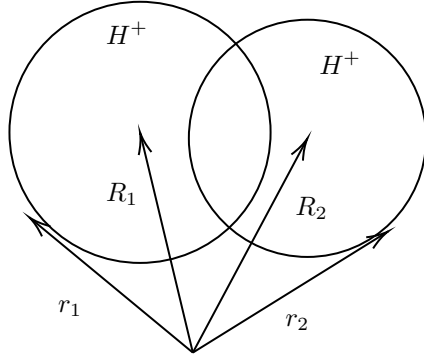
$$\begin{aligned}\langle\varphi|\hat{H}|\varphi\rangle &= \sum_{m,n} c_m^* c_n \langle m|\hat{H}|n\rangle = \sum_{m,n} c_m^* c_n \varepsilon_n \\ &= \sum_n |c_n|^2 \varepsilon_n \\ &= \sum_n \varepsilon_n |c_n|^2\end{aligned}$$

となる。 ε_n を ε_0 に置き換えることである。すると、

$$\langle\varphi|\hat{H}|\varphi\rangle = \sum_n \varepsilon_n |c_n|^2 \geq \varepsilon_0 \sum_n |c_n|^2 = \varepsilon_0$$

となるので、近似の波動関数は基底状態よりも大きなエネルギー状態を持つということである。

$|\varphi\rangle$ を見つけて。低い値が見つければそれは基底状態であることがわかる。



となり、画像の中の文字はすべてベクトルとして考える。ここで、水素原子のハミルトニアンを考えると、

$$\hat{H} = -\frac{\hbar^2}{2m}(\nabla_1^2 + \nabla_2^2) - \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0} \sum_{i=1}^2 \sum_{j=1}^2 \frac{1}{|\mathbf{r}_i - \mathbf{R}_j|} + \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0 |\mathbf{r}_i - \mathbf{r}_j|}$$

となり、 H^+ からの引力と電子同士の斥力の輪でわかる。 \mathbf{r}_1 に注目し、 \mathbf{r}_2 は平均値 $\langle \mathbf{r}_2 \rangle$ で置きかえる。

すると、

$$\hat{H}_2 = -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla_1^2 - \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0} \left(\frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \mathbf{R}_1|} + \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \mathbf{R}_2|} \right) + \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0} \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \langle \mathbf{r}_2 \rangle|}$$

となる。

試行関数を使ってみる。

$$|\varphi\rangle = c_1|1\rangle + c_2|2\rangle$$

となる。ここで、 $|c_1\rangle$ は原子 1 の 1s 軌道であり、 $|c_2\rangle$ は原子 2 の 1s 軌道である。水素分子の変分法としては、電子 1 は原子 1 の 1s 軌道であるか？ 原子 2 の 1s 軌道のどりかということである。

変分法の肝は trial function として、求まったもので基底状態のエネルギーを求めることである。

この時、 $|1\rangle$ を $|\varphi\rangle$ にかける

$$\begin{aligned}\langle 1|\hat{H}_2|\varphi\rangle &= \langle 1|\hat{H}_2|1\rangle c_1 + \langle 1|\hat{H}_2|2\rangle c_2 \\ &= \varepsilon c_1 + s\varepsilon c_2\end{aligned}$$

となるはずである。ここで、 $\langle 1|\hat{H}|2\rangle = t$ である。

この時に、

$$\begin{aligned}\langle \varphi|\hat{H}_2|\varphi\rangle &= \int d^3r \phi^* \left(-\frac{\hbar^2}{2m} \nabla_1^2 + \frac{e^2}{4\pi\varepsilon} \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \mathbf{R}_1|} \right) \varphi + \int d^3r \phi^* \left(\frac{-e^2}{4\pi\varepsilon} \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \mathbf{R}_2|} + \frac{e^2}{4\pi\varepsilon} \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \langle \mathbf{r}_2 \rangle|} \right) \varphi \\ &\simeq \int d^3r \phi^* \left(-\frac{\hbar^2}{2m} \nabla_1^2 + \frac{e^2}{4\pi\varepsilon} \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \mathbf{R}_1|} \right) \varphi + 0\end{aligned}$$

電子の位置に対して対称なハミルトニアンであるために、電子 1 が原子 1 にいてさらに電子 2 も電子 2 にいるような確率はほとんど 0 としてよい。すると、 $\langle \mathbf{r}_2 \rangle \simeq \mathbf{R}_2$ であるから、第二項は 0 としてもよい。そして第一項は ε_{1s} と同じ。ここから、まったく同様に $|2\rangle$ を使うと、

$$\begin{cases} c_1\varepsilon_{1s} + c_2t = c_1\varepsilon + c_2\varepsilon s \\ c_1t + c_2\varepsilon_{1s} = c_1\varepsilon s + c_2\varepsilon \end{cases}$$

この解の非自明なものを考えると、

$$\varepsilon = \frac{\varepsilon_{1s} \pm t}{1 \pm s}$$

となる。 $t = \langle 1|\hat{H}_2|2\rangle$ 1s 軌道の場合ならマイナスである。

重なった時の波動関数の+とマイナスについて考える。簡単のために、 $s = 0$ とすると。 $\varepsilon_{12} + t$ に対して、 $c_1 = c_2 = \frac{1}{\sqrt{2}}$ であり $\varepsilon_{12} - t$ に対して $c_1 = -c_2 = \frac{1}{\sqrt{2}}$ となることがw耀。第一励起状態は、 $\varepsilon_{12} + t$ となり、

$$\begin{cases} \varepsilon_{12} + t & \frac{1}{\sqrt{2}} (|1\rangle + |2\rangle) \text{ 結合軌道} \\ \varepsilon_{12} - t & \frac{1}{\sqrt{2}} (|1\rangle - |2\rangle) \text{ 反結合軌道} \end{cases}$$

2.0.3 水素の一次元結合

格子間隔は a としよう。

$$\hat{H}_N = -\frac{\hbar^2}{2m} \nabla_1^2 - \frac{e^2}{4\pi\varepsilon_0} \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - n\mathbf{a}|} + \frac{e^2}{4\pi\varepsilon_0} \sum_{n=1}^N \frac{1}{|\mathbf{r}_1 - \langle \mathbf{r}_2 \rangle|}$$

となる。

$$\hat{H}|\varphi\rangle = \varepsilon|\varphi\rangle$$

となり、 $|\varphi\rangle = \sum_{n=1}^N c_n |n\rangle$ となり、左から $\langle m|$ を書けると、前回とまったく同じ議論をすれば、

$$\begin{aligned}\langle n|\hat{H}_N|n\rangle &= \varepsilon_{1s} \\ \langle m|n\rangle &= 1 \\ \langle m|\hat{H}_N|n\rangle &= t(m=n\pm 1) \\ \langle m|n\rangle &= s(m=n\pm 1) \\ \langle m|\hat{H}_N|n\rangle &= \langle m|\varepsilon|\varphi\rangle\end{aligned}$$

となる。ここから、

$$\sum_{n=1}^N c_n \langle m|\hat{H}_N|n\rangle = \varepsilon \sum_{n=1}^N c_n \langle m|n\rangle$$

となることから

$$tc_{m-1} + \varepsilon_{1s}c_m + tc_{m+1} = \varepsilon c_m + \varepsilon sc_{m-1} + \varepsilon sc_{m+1}$$

となり、連戦振動の回と波動の解を持つ。ここで数理物理学で考えたことを考えると、

$$c_m = e^{ikam}$$

を代入してあげると、

$$te^{-ika} + \varepsilon_{1s} + te^{ika} = \varepsilon + \varepsilon se^{-ika} + \varepsilon se^{ika}$$

からエネルギーを求めることは簡単で、実数部分をとってあげると

$$\varepsilon = \frac{\varepsilon_{1s} + 2t \cos(ka)}{1 + 2s \cos(ka)}$$

となる。

ここから、 $s \simeq 0$ とすると、

$$\varepsilon \simeq \varepsilon_{1s} + 2t \cos(ka)$$

となる。